

長年環境問題に携わり、エコロジカルなモノづくりについて確固とした考え方がある。それは、なるべくその土地固有の資源を積極的に利用するということである。産業革命以降、モノの移動距離が飛躍的に伸び、気がつけば身の回りには世界中の資源から作られたモノで溢れるようになった。ライフスタイルも大きく変化し、近くのスーパーでは世界中からの食材が簡単に手に入るようにもなった。しかし、モノや資源の移動には大量のエネルギーが必要であり、このような便利な世の中の代償として環境破壊という側面があることを忘れてはいけない。

では、究極のエコロジカルなサーフボードとは？木製サーフボード教室の開催は、そんな自分自身への問いかけから始まった。まず身の回りにある材料でサーフボード作りに使えそうなものを探したところ、幸運なことに、祖父が自宅の裏山に植樹し、それを父が数年前に伐採し製材した桐の板が見つかった。サーフムービー「スプラウト」でトム・ウェグナーが桐を使いエコロジカルなサーフボードを作ることを以前から知っていた私は、自分もこの裏山で育った桐の板を使ってサーフボードを作りたいと思うようになり、これこそが究極のエコロジカルなサーフボードと思うようになった。しかし、材料はあるものの木製サーフボード作りはおろかサーフボード作りの知識など全くない。そんななか、インターネットで情報収集してみたところ、Paul Jensen 氏の HollowSurfboards.com にたどりついた。よく調べてみると、何やら 500 ページ以上からなる中空木製サーフボード作りのマニュアル「How To」が 100 ドルで販売されていた。頭の中で、急に「裏山の桐サーフボードプロジェクト」が現実味を帯びはじめ、そして気づいた時には、Paul 氏のホームページ上で「How To」の購入ボタンを押していた。

その後、購入した「How To」マニュアルを辞書を片手に紐解くも、ところどころに禅問答のような部分があり、いつしか中空木製サーフボードにも増して、Paul Jensen という人物にも興味を持つようになり、直接本人に会いたいという思いが次第に強くなった。最も手っ取り早い方法は、Paul 氏が世界各地で開催する中空木製サーフボード自作教室に参加することだと思ったため、Paul 氏のホームページから 2010 年の教室開催情報を探したところ、何と 2010 年の教室開催候補地に日本があり、現地での世話役を募集していることがわかった。当時アライア作りに没頭し、木について実体験から色々と学んでいた私にとって、これは願ってもない情報で、とにかくその日のうちに Paul 氏へ E-mail を送信し世話役を申し出た。教室の開催場所や時期は全くの白紙だったが、後に Paul 氏から千葉幕張にて独自の方法にて中空木製サーフボードを製作する nobbywoods surfboards の Nobby 氏を紹介いただき、開催場所と時期を決定した。なにはともあれ、このような経緯で Paul Jensen

氏を招き、千葉県山武地域において中空木製サーフボード自作教室を開催することが決まった。

教室の開催案内が告知されると全国各地からの問い合わせが舞い込んだ。ちょうどその頃、NHKの大河ドラマの龍馬伝では、幕末の神戸の海軍操練所のストーリーが放送されており、全国から志士が集結し、航海術、砲術、測量術を熱心に学ぶ様子を紹介していた。急に木製中空サーフボードが黒船のような存在と重なり、全国から多数寄せられる問い合わせに、全国各地から集結することになる志士達との共有する時間を想像した。実際、遠く宮崎から30数時間のドライブで辿りついた者、福岡から一睡もせず運転し第1日目の朝に会場入りした猛者をはじめとし、今のフォームを主体とするサーフボード作りに満足しない志士達が全国各地から千葉県の会場に集結した。5日間にわたった教室開催の様子は、以下のPaul氏とNobby氏のブログに掲載されているので、ご覧いただきたい。

<http://hollowsurfboards.blogspot.com/2010/09/11-day-one-hws-japan.html>

<http://blog.nobbywoodsurfboards.com/?day=20100926>

材料には、千葉県山武地域と特産である山武杉を用いることとした。強度的に優れた山武杉は、かつて造船用の材料としても重宝され、東京湾での漁業では打瀬舟と言われる木造船が多く用いられていた。しかし現在では、山林が我が国の約66%を占めているにも関わらず、日本国内で消費される木材の約7割が安価で安定供給が可能な外国からの輸入に依存しており、日本の林業の衰退が指摘されている。少し大袈裟に言えば、今回の教室開催は、木製サーフボード製作を通じて国産材の価値を見直し、我が国の林業が抱える問題の解決の糸口を模索するという試みでもあった。杉を選択したのは、杉が我が国の人工林の約4割を占めると言われるほど、全国各地に植林されており、その有効活用方法が検討されているからであった。今回の教室では、地元青年部の協力もあり、良質な無節の山武杉を用いることができ、仕上がったサーフボードはどれもこれもため息が出るほど美しい仕上がりとなった。

千葉には、「地産地消」という言葉をもじって「千産千消」という言葉がある。今回の教室には、地元千葉からの参加者が2名いたが、彼等が「千産千消サーフボード」によるサーフィンの素晴らしさを実感し、今後千葉において木とサーフィンの文化を伝える役割の一翼を担うことになるはずである。また、他県からの参加者は、今後地元に戻って山に入り、その土地の木を探して、各地で地産地消サーフボード作りを実践してくれるに違いない。そのうち、このようなムーブメントがサーファーの身の回りの自然に対する価値観を

変え、山から川、そして海へのつながりを感じながらサーフィンするようになるものと切に願っている。

日本における木製サーフボードの文化はまだ始まったばかりである。実際に今回の教室でもまだまだ改良の余地が多くあることも実感した。なぜなら我が国には社寺建築に見られるような独自の木の文化があり、それらをサーフボード製作の工程で活かすことが出来れば、より木の特性を活かしたサーフボード製作が可能だからである。かの宮本武蔵が残した「五輪書」にも、大工の棟梁が木の性質と職人の技術を見極めた上で、木と人を家の各箇所に配分する様子が紹介されており、日本の職人が昔から持っている匠の世界が描かれている。ここでは細かな話は避けたいと思うが、既に Nobby 氏は独自の方法により、環境負荷の少ないボードを製作している。これまでに数回試乗させていただいたが、中空木製サーフボード独特の心地良い浮遊感とターン時に感じる木が本来持っているフレックスの効いたドライブ感、フォームのボードとは比較できないぐらいの別の次元の乗り心地がし、最初に波の上に立って滑った時の記憶と同じレベルで、今でも足裏と脳裏にしっかりと記憶されている。これから、日本人の独特の感性で木製サーフボードがさらに進化し、普段使いとしての木製サーフボードが広まることを確信している。教室開催期間中もやはり禅問答の繰り返しだった Paul さんも、おそらく日本発の木製サーフボードが世の中に登場することを期待しているだろう。

最後に今回の教室開催は、様々の方の協力と理解のもと実現することができた。この場をお借りして、本教室の趣旨に賛同し全国から駆けつけてくれた参加者の皆さん、講師の Paul さん、地元コミュニティとの諸調整に奔走していただいた Nobby さん、教室開催告知と参加者からの問い合わせに対応してくれたサーフライダーファウンデーション事務局の筈谷さん、教室開催中に電動工具の使い方等の技術的なサポートをしてくれた鴨川の上田さん、無節の山武杉を手配してくれた地元青年部の方々、遠方からの参加者のための休息と飲みニケーションの場を提供してくれたよもぎ館の鈴木さん、準備期間から迷惑をかけながらも快く私を送り出してくれた家族、全ての方に改めてお礼を申し上げたいと思う。

寺内元基